

生涯スポーツを志向する体育学習における「手段的／目的的価値」
の取り扱いに関する研究
～「楽しい体育」論を手がかりとして～

日野 晃希

長見 真

キーワード： 生涯スポーツ 体育学習 「手段的／目的的価値」

Study about Handling of [extrinsic/intrinsic value] in physical education intending to lifelong sports
～Adopting a theory of [Tanoshii-Taiiku] as a clue～

Koki Hino

Makoto Nagami

abstract

In this main subject, it was to consider about how it should be treated about [extrinsic/intrinsic value] in physical education which oriented to lifelong sports, and study model of physical education which has possibility to surpass the theory of [Tanoshii Taiiku].

As a conclusion, [extrinsic value] acquisition is possible according to [intrinsic value] acquisition. It is necessary to handle [extrinsic/intrinsic value] in parallel. [Tanoshii-Taiiku] is not answered criticism that [extrinsic value] cannot acquired. And [Tanoshii-Taiiku] take the place of this, and Tomozoe's [Responsibility study theory], and Takahashi's study theory appeared. But, Two study theories have a possibility that these fall into the concept of 'education through movement'.

It can be study model of physical education which has possibility to surpass the theory of [Tanoshii Taiiku] by using that 3 point.

-Switching teacher's thinking from the concept of 'education through movement' to 'education in movement'.

-Changing from "scientific knowledge" to "practical knowledge" in physical education

-Integration of value concept of [extrinsic/intrinsic]

Key Words : lifelong sports, physical education, [extrinsic/intrinsic value]

1. 問題の所在と研究の目的

日本における学校体育の目標は、1970年代までの「産業社会」における「運動手段論」の体育学習から、1970年代から現在までの「脱工業社会」における「運動目的論」の体育学習へと変遷を遂げてきた。「運動手段論」の体育学習は、体力や社会性の育成といった、運動そのものの外にある「手段的価値」を獲得することを第一に目指し、「運動目的論」の体育学習では、生涯スポーツに参加することを目指すという「目的的価値」の獲得を第一に目指している。この「運動目的論」における具体的な学習論の1つに、運動の楽しさに触れ、深めることを学習の中核にして捉えている「楽しい体育」論があるが、それは1977年改訂の学習指導要領にもその思想が盛り込まれている等社会的な地位を確立しており、公に認められた理論でもある。

しかしながら「楽しい体育」論の体育学習は「手段的価値」が獲得されないのは勿論、「目的的価値」の獲得すらも図られず、「運動目的論」の生涯スポーツに繋がらない、情緒的な楽しさを重視した放任の学習である、若者のモラル低下やいじめ・自殺等の教育課題解決が目的の体育学習を行うべきである、等という批判等を浴びてきた。更に2008年の学習指導要領改訂によって、これまでの「楽しさ」を求める体育学習から「確かな学力」を身につけさせることを目指すような学習に重点を置くように転換が図られた。

そこで、本研究では、生涯スポーツを志向する「運動目的論」の体育学習において「手段的価値」「目的的価値」の獲得をどのように取り扱うべきか、そしてこの「価値」概念に焦点を当てながら「楽しい体育」論を乗り越えようとする将来の体育学習はどのような理論で組み立てられるべきかを検討することを目的とする。

2. 研究の手順

まず戦後の体育学習を学習指導要領を手がかりに概観し、戦後から1970年代の「産業社会」、1970年代以降の「脱工業社会」というそれぞれ2つの社会変化に照らし合わせながら整理する。続いて1977年の学習指導要領に初めて「楽しさ」が盛り込まれてきたきっかけである「楽しい体育」論の概要を述べていくと同時に「運動手段論」「運動目的論」の重要な理論の一部である「手段的／目的的価値」を、見田宗介の「価値意識の理論」を参考に詳細に検討していくと同時に「形式陶冶」「実質陶冶」の概念を整理する。

続いて、「手段的価値」獲得をめざす「運動手段論」、「目的的価値」めざす「運動目的論」の検討を「楽しい体育」論の詳細な分析と共に行い、戦後から現在までの学習指導要領を「手段的価値」「目的的価値」の取り扱いに焦点を当てながら、再度考察する。

そして、「楽しい体育」論は「手段的価値」達成を成し得ないという批判が存在しているため、「運動目的論」の「手段的価値」取り扱いの先行研究、または学習理論に対しての批判や誤解等を挙げ、この批判等の中で「価値獲得」に焦点を当てながら、現在の「楽しい体育」論を乗り越えようとする、新たな視点の体育学習モデルを提示し、今後生涯スポーツを志向する体育学習において「手段的価値」「目的的価値」をどのように扱っていくべきか、「楽しい体育」論を手がかりに考察し、「運動目的論」の学習モデルとなる可能性を考察する。

3. 「運動手段／目的論」と「楽しい体育」論

戦前の体育学習は軍事的な訓練、走・跳・投や泳ぐ等の基本的な運動を用い、第2次世界大戦に貢献できる人間、兵士を育てるために体育学習が行われており、更には、日本という国家へ従順な人間を育てるといふ、全体主義的な日本国民を育てるためという意図の体育学習が同時に行われており、体育学習は、当時の日本にとってとても重要な役割を占めていた。

以上のような体育学習は、終戦を迎えると同時に民主化された体育学習に変遷を遂げていく。そして、日本は重工業などの生産を中心とする「産業社会」に突入していき、高度経済成長を迎えるが、1970年代を境に「産業社会」での中心であった「生産」から、「消費」という「脱工業社会」へと社会がシフトしていった。この社会変化から戦後における体育学習目標の流れを読み取っていくと、1968年の小学校学習指導要領までは「発達目標」、「技能目標」、「体力目標」が第一目標として扱われており、それを獲得するために運動が行われていた。しかし、1977年改訂の小学校・中学校学習指導要領改訂において「楽しさ」が第一目標となり、戦後から1970年代までの「産業社会」の体育学習を、体力向上や社会性の育成を第一目標とする「運動手段論」の体育学習、また1970年代以降は、運動を行い楽しむことを第一目標とする「運動目的論」の体育学習、が行われているのである。

そして「産業社会」から「脱工業社会」への移行期、全国体育学習研究会（以下全体研）は、「運動手段論」

の体育学習から脱却を図るために、「運動目的論」における具体的な学習モデルである「楽しい体育」論を打ち出した。「楽しい体育」論は、「運動手段論」の体育学習によって行われてきた訓練の要素が強い体育学習からの脱却を図るため、デューイの「プラグマティズム」を用いて「訓練から学習へ」転換を図っていたが、身体的な訓練という意味の手段要素だけではなく、「目標達成のための運動の手段的な扱い」という部分をもクリアする必要があるために、運動を行うこと自体を目的化することが必要であったのである。そこで運動を教育的意義の面から捉えるのではなく、文化的側面から捉えていくことにより運動を行うことそれ自体は自己の欲求を満たすためであるという、ホイジンガやカイヨワの「プレイ論」を「楽しい体育」論の根拠としたのである。この「プラグマティズム」と「プレイ論」という2つの理論を基礎として「楽しい体育」論は成立している。

4. 「手段的／目的的価値」の考察

見田は「価値」の定義を『主体の欲求をみたと、客体の性能』とし、この補足として「その一般的な機能は、意識的行為における選択の基準となること」及び「それは元来、人びとの選択的行為から推論された構成概念」(見田,1966,p.17)の2つを挙げている。そして、「手段的価値」「目的的価値」についてであるが、この2つの関係について見田は、「目的は多くの場合、より長期的・より一般的な観点から見れば手段にすぎない。また、逆に手段は常に、個々の行為の観点から見れば目的である」(見田,1966,p.129)とし、手段と目的を相対的な概念と述べているが、「ギブスは、骨折を治療する手段としてのみ価値があり、それ自体は何らの欲求も充足させない。それに対して、おいしいお菓子は、何の『効用』も含まなくとも、それ自体快樂の源泉である」と例を挙げている。また、「目的はみずからの価値を『発散』するが、手段はたんに、目的の価値の一部を『反映』しているにすぎない」(見田,1966,pp.71-72)と、目的と手段を明確に区別して認識しているのである。つまり、休日に仲間とスポーツを行うことはそれ自体が楽しいことでありそれ以外の何物でもないが、試合に勝つための辛く厳しいトレーニングは「試合に勝つこと」等という目的における単なる手段の一部にすぎないということであり、仮にも目的である試合が存在しなければ「試合」に勝つための厳しいトレーニング自体存在しないということになる。どんな人間さえも、無目的な辛く厳

しい行動を自主的に行わないはずである。

更に見田はこの手段と目的の関係について、「一つの現実の行為において、一つの直接的な価値は、その手段や条件や障害としての、様々な間接的価値のセットをひきつれている」と述べ、「われわれがいったん実際に、行為というデータからその底にある価値意識を推論する作業にかかるや否や、われわれは一つの行為からたった一つの『真の』動機を引き出すことを無益にもこころみがちであり、あるいはまた一つの動機が確認されると、それで安心してしまったりする」(見田,1966,pp.72-73)という。つまり、我々がスポーツを楽しむという「目的的価値」を獲得しようとスポーツを行う行為の背景には、そのスポーツを楽しむことの目的以外にも、様々な「手段的価値」の獲得が意識的か否かに関わらず、必ず関係しており、1つの「目的」を追求するために行う行動が遂行した場合、これに満足するという。ここでの「手段的価値」は、体力向上や減量、仲間とのコミュニケーションが当てはまるといえるが、このような「目的的価値」と「手段的価値」の相互的な関わりがあるにも関わらず、我々はその行為に対して一つの「価値」のみを見出そうとするというのである。

ここまでの見田の考察について、価値の系列というものは「必ず目的があり、いくつかの手段で構成されている」ということがいえる。なぜなら、手段は目的の一部を反映しているものにすぎないということは、翻って考察すれば「目的が存在してこそ手段が存在するのであり、手段が存在するのは目的が存在するから」と解釈できる。これまでの論から導くことができる「手段的価値」と「目的的価値」の関係は、我々は客体に存在する「目的的価値」を獲得しようとするにおいて、いくつかの「手段的価値」を無意識的に獲得していると考えられ、逆に、「目的的価値」なしでは「手段的価値」を獲得できない、つまり両者の関係性は、「目的的価値」ありきの「手段的価値」で成り立っているのである。

5. 「価値概念」から見た学習指導要領の変遷

「運動手段論」の体育学習において3度の学習指導要領改訂が行われ、1970年代以降の「運動目的論」の体育学習においては4度の改訂が行われたが、「運動手段論」の体育学習の特徴としては主に「身体的目標」、「技能的目標」、「社会的目標」等を第一に獲得すべき目標として掲げており、学習内容としてのスポーツ等を「手段的価値」獲得のために取り扱ってい

た。また、1977年からの「運動目的論」における体育学習の特徴として、目標に「楽しさ」の要素が盛り込まれ、「目的的価値」の獲得を目指そうとしたことや、1988年の改訂からは「究極目標」に「生涯スポーツ」を掲げ、「目的的価値」獲得を目指そうとしていた。このようなことから、「運動目的論」における4回の改訂は、「目的的価値」獲得を目指す体育学習が目指されていることが読み取れよう。

しかしながら、この学習指導要領の変遷と「価値」の関連について2つの問題点が存在する。1つ目は「産業社会」時における学習指導要領に「目的的価値」の目標が設定されていなかった、つまり「運動手段論」の体育学習では「目的的価値」の獲得がなされていなかったこと。また、2つ目は目標に「目的的価値」獲得が盛り込まれた「脱工業社会」における4度の学習指導要領改訂にて、下位目標の中に「手段的価値」と「目的的価値」の獲得2つが設定されていることである。

まず、1つ目の問題点についてであるが、これまでの体育嫌いの子どもの出現や好き嫌いの二極化等を振り返ってみれば、これまでの「運動手段論」が成功した体育学習の理論であるとは一概には言えない部分があり、4.「手段的／目的的価値」の考察、の部分で述べてきたように「手段的価値」獲得は「目的的価値」無しでは獲得し得ないものなのである。このようなことから考えて、「手段的価値」獲得を目指していた「運動手段論」の体育学習には限界があったと言わざるを得ない。しかしながら、この限界は「運動手段論」を否定するものではなく、先に述べたような社会変化等による必然的なものであることを強調しておく。

続いて2つ目の問題点を考察してみる。「運動目的論」の体育学習では4度の学習指導要領改訂が行われているが、この全ての「下位目標」に「手段的価値」と「目的的価値」が並列されており、1977年の学習指導要領改訂においてこの「価値」並列の問題点が指摘されている。それに伴い1988年以降3度の学習指導要領では「上位目標」に「目的的価値」、「下位目標」に「手段的価値」を置き、この問題点を改善したとしているが、この問題点は改善されていないだけでなく、「楽しい体育」論の影響を受けたはずの学習指導要領が、「楽しい体育」論の理論と相違が見られるのである。

まず、「楽しい体育」論は「運動目的論的体育」と運動手段論的体育は対立するものではなく、むしろ両

立することによって、いっそう大きな成果を期待できる」(高橋ほか, 2002, p.43) 体育学習として考えられており、この思想が基盤にある。従って、「手段的価値」及び「目的的価値」という概念自体を、上位・下位目標として設定するものではない。しかしながら学習指導要領を再度見てみると、「上位目標」として「楽しさ」や「喜び」の「目的的価値」獲得を挙げ、「下位目標」に「体力向上」等の「手段的価値」を挙げており、「楽しい体育」論の「価値」概念とは異なっていることがわかる。これは「楽しい体育」論を生み出した全体研と、学習指導要領との間に、「価値」概念における解釈の食い違いが生じたために発生した問題だと考えられるのである。

6. 「運動目的論」における「価値概念」の考察及び「楽しい体育」論に対する批判

「運動目的論」の体育学習が「目的的価値」だけではなく、「手段的価値」をも獲得できるということを明らかにした先行研究は、鈴木による『「運動目的・内容論」における運動の手段的な価値の取り扱いに関する一考察』(鈴木ほか, 1990, pp.117-123) である。これは、あるパブリックスクールが荒廃していた際に狩猟の代わりにスポーツ(遊び)を学生たちに行わせたところ、狩猟よりも楽しんで行い始めただけではなく、学校がたちまち落ち着きを取り戻したというものである。このスポーツの導入当初は休み時間における単なる遊びであり、教師は全く子どもたちに介入していなかったが、子どもたちは自らスポーツを行い、自身達で発展させていったのである。これはスポーツの「楽しさ」(目的的価値)を獲得すると同時に、「社会性の育成」(手段的価値)も同時に獲得できる、ということを実証したものである。また、当時19世紀後半にスポーツは遊びとしてだけではなく、教育としても扱われるようになったのである。もう1つは「運動目的論」においてどのように「手段的価値」を位置づけていくのか、についてである。同じく鈴木はアーノルド、グルーベ、シーデントップ、の3氏の「スポーツ教育」論をまとめている。彼らはそれぞれ「運動目的論」の立場に立つが、「手段的価値」獲得を軽視はしておらず、逆に獲得すべきものとしてみており、それにはある条件が必要だとする。「アーノルドは、運動の手段的な価値をめぐってどれくらい成果を生み出すことができるのかは、教師の意向、知識、想像力、スキルにかかっている考え、グルーベは、そのような成果を現実のものとする為に

は、教育学的・医学的示唆が必要であると主張し、またシーデントップは、その活動がプレイとなった時にそのような成果は生じる」（鈴木ほか,1994,pp.1-32）と鈴木は3氏の主張を挙げる。更に、彼らは「運動手段論」の学習を批判しており、「『本質的に価値があるものを促すことと直接関係しないのであれば、教育の関心事にはならない』『多くの人々を病気にする』『魅力がないものになってしまう』（鈴木ほか,1994,p.23）と、「手段的価値」それ自体を獲得する目的で学習を行うことについて否定的に主張していると鈴木は述べる。

続いて、「楽しい体育」論に対してのこれまでの批判を簡単に挙げていく。まずは全体研の佐伯と小野による「楽しい体育」論の「体力」に焦点を当てた論争（小野,佐伯）、続いて多々納における「楽しい体育」論の認識論的批判（多々納,1990）、最後に石田による「楽しい体育」が失敗であった、と言われるに至った経緯や原因の考察、の3つである。これらの批判を検討していくと、普及の段階で「楽しい体育」論はイデオロギー不在の学習論になってしまい、本質の部分が抜け落ちていることが批判を受ける大きなポイントといえる。石田が指摘した「楽しい体育」論はマニュアル化を奨励する「科学の知」の体育学習に陥っている、という点はまさしく本質が抜け落ちたまま普及されている結果に起こったことであることがよく分かる。なぜなら「楽しい体育」論は「B41枚の学習指導演案」というコンセプトの下において学習の組み立てを目指しており、目の前の子どもたちの状況に応じた学習、すなわち「実践の知」を重視している学習論なのである。「B41枚の学習指導演案」という客観的にみて学習がイメージしにくい「実践の知」よりも、学習目標や学習内容が明記される「科学の知」の方が、「何を学んだのか？」という疑問に対し回答が容易である。しかし、この「確かな学力」を獲得する過程において、再度「手段的価値」の体育学習に逆戻りしてしまうことが危惧される可能性があるのである。

7. 「楽しい体育」論に代わる体育学習とその可能性の検討

「楽しい体育」論に代わる可能性を持つ体育学習モデルの1つ目は友添秀則の「責任学習論」である。この責任学習論は、Hellisonの責任学習を基にしてつくられたものであり、「人格的・社会的発達目標を体育のカリキュラムに明示的に位置づけ、子どもの人

格発達の段階をレベル0からレベル5までに区分し、授業の中で子どもの行動に直接的フィードバックを与えながら、意図的な教授方略を用いて、学習者がより高次の責任レベルに到達するよう授業を構成する」（梅垣ほか,2006, pp.11-22）学習である。

もう1つは高橋健夫が提示している学習論であるが、これはクルムの学習論をベースにしたものであり、「『運動学習』『社会学習』『認識学習』『情意学習』の4つ」（高橋ほか,2002,p.43）から成り立っている。それぞれ「運動学習」では、「運動やスポーツの個人的運動技能の向上や、集団的な運動技能（戦術）の向上に関わる目標」であり、「技能習熟に必要な認知的学習に関わる」目標、「社会学習」は、「運動学習で必要とされるマナー、エチケットといった社会的スキルや人間関係スキル等の社会的行動様式」や、「スポーツ集団の組織運営能力や共同学習の仕方」を獲得させる目標、「認識学習」では、「運動学的知識やバイオメカニカルな知識の運動学習に関連したもの」、「運動やスポーツに関わる科学的知識や概念学習が対象とする知識の習得」、「情意学習」は「運動やスポーツに対する興味、関心、意欲、肯定的な価値観などの愛好的態度の育成に関する目標」が設定されている。

この4つの学習の最低限の基礎的技能を備えた上で、「『楽しさを求めた学び方の学習』（高橋,1997,p.22）を行う必要があるという。この「楽しさを求めた学び方の学習」には技能習得だけではなく、ルールやマナー等の学習も含まれた「手段的価値」の獲得をも目指しているといえる。また高橋は「私達が、運動生活に求める楽しさは、個々人の技能レベルに応じてであっても、常にある技術的課題をもち、これを解決し向上するところに存在している。このような楽しさを、私は『身体的自由への願望を実現する喜び』と理解している。もっと言えば、プレイの機能的特性のさらに基盤となる楽しさが存在」（高橋,1997,p.23）し、技能を習得することや、技能が習熟することは、自ずと「プレイ」の学習に繋がっていくものであると述べているのである。

以上2つの学習モデルを述べてきたが、これまでの体育学習論から考察していくと、どうしても「手段的価値」が先行していく体育学習モデルであり、今後の生涯スポーツを志向する体育学習として完全な学習モデルとは言い切れない。これは、現在まで行われてきた「手段的価値」及び「目的的価値」が、二項対立的な立場で考察されてきたことによる弊害であろう。「手段的価値」の獲得を目指す「目的的価値」が

獲得できず、その逆もまた然り、という概念を乗り越えない限り、新しい体育学習モデルが生まれることは困難であると考える。

8. 総括と提言

見田の「価値概念」について検討を行い、「手段的価値」獲得は「目的価値」の獲得により初めて成しえるものであることを明らかにした。同時に、「楽しい体育」論においても同様、「手段的価値」は「目的価値」に包括されているという理論を含んでいる。また、学習指導要領はこれまで「手段的価値」のみが第一目標に設定されていた、もしくは上位目標に「目的価値」、下位目標に「手段的価値」及び「目的価値」が設定され、全体研の解釈とは異なっていた。更に「運動目的論」の体育学習において「手段的価値」は獲得可能であるが、「楽しい体育」論は「手段的価値」獲得批判に対して完全に答え切れていないことが明らかになった。それに伴い、友添の「責任学習論」及び高橋の学習論のような新たな可能性を含む体育学習モデルが提示されているが、「運動手段論」の体育学習に陥る可能性が示唆された。

そこで、「運動目的論」の体育学習はどのような理論で成立するのか。ここでは以上挙げた2つの学習モデルを参考に、新たな学習モデルとなり得る可能性を考察していきたい。

まず1つ目は「運動手段論」の体育学習から脱却しきれていない教師の「運動目的論」への移行であろう。現在においても「運動手段論」の体育学習が行われている現実を目を向け、このような教師の思想を「運動目的論」の立場に立つ学習を行うように転換させる必要がある。

2つ目は「楽しい体育」論、もしくは他の体育学習モデルを「科学の知」から「実践の知」(石田ほか, 2006, pp. 107-116)の体育学習へ移行させることである。先に述べたアーノルド、グルーベ、シーデントップは、「運動目的論」における「手段的価値」は獲得できると述べてはいるものの、無条件で「手段的価値」が獲得できるとは考えておらず、一定の条件で初めて獲得できるものであるとする。つまり、「ある一定レベルの努力やオリジナリティ」を教師自身が求め、それを学習に活かさなくては「手段的価値」を獲得するチャンスが生まれえないという。それ故、「楽しい体育」論を含めた生涯スポーツを志向する体育学習は、どのような教師でも一定の学習成果を挙げられるというマニュアル化された「科学の知」ではなく、教師

自ら体育学習をつくっていくという「実践の知」の立場に立つものでなくてはならないということである。

「運動手段論」からの脱却、「科学の知」から「実践の知」への移行、この2つをクリアした最終的な段階として、「手段的価値」及び「目的価値」の両者を獲得できるという両者の価値を包括した「価値概念の統一化」システムの確立が可能となってくるであろう。これまで述べてきたように、現在までの二項対立的な価値概念を体育学習モデルから取り除く必要があるからだ。むしろ、この両価値概念の二項対立的な構図を転換しない限り、これまでのような堂々巡りが行われる可能性が存在している。

これまでの考察をまとめると、「運動目的論」の立場に立つ「実践の知」化を成し遂げ、更には「価値概念の統一化」を乗り越えた体育学習モデルが、生涯スポーツを見据えた体育学習モデルとなる可能性を持つことができると考えられる。

今後、「楽しい体育」論とは異なる学習が更に展開されてくると予想され、それは新しい可能性を多様に含んだものとなっているであろう。しかし、全体研はこれまでの「楽しい体育」論を越えるような体育学習、「手段的/目的価値」を包括した体育学習論を提示することができず、様々な批判に答え切ることができなかつたということが、「楽しい体育」論が失敗であったと評価された原因の1つであり、勿論これまで述べたような自己批判や自己反省も含めたものである。しかし、本来「楽しい体育」論には両者の価値を包括する思想が既に存在しており、「楽しい体育」論を越えるような新しい体育学習を提唱し、これまでに挙げてきた「楽しい体育」論に対する批判や評価を乗り越え、新たな体育学習モデルを模索しようとしていることも事実であろう。そのきっかけとなるのが、「楽しい体育」論の思想的基盤の1つである、「プレイ論」の再考であることは間違いない。「プレイ」、つまり遊びという、スポーツや運動に欠かすことのできない要素は体育学習においても当然欠けてはならず、むしろ体育学習の中核として捉えておく必要がある。そして、「手段的/目的価値」をトータルに考えることができる「価値概念の統一化」の理論を更に深める必要がある。これまでの「楽しい体育」論を更に発展させ、乗り越えていくためにも、その思想的基盤である「プレイ論」を再考察し、「楽しい体育」論の思想を再構築・普及させていくことが、避けては通れない道であることは間違いない。

文献

石田智巳・坂元桂・原通範 (2006). 体育科教育における楽しさに関する研究 I—「楽しい体育」の失敗から引き取るべき課題—. 和歌山大学教育学部紀要. (第 56 集), pp. 107-116.

見田宗介 (1966). 価値意識の理論. 東京, 弘文堂, p. 17.

小野三嗣 (1980). 「楽しい体育」をめぐる問題 (1) 体育の哲学確立を一健康維持の体力づくりの立場から—. 学校体育 (第 33 巻 6 号),

小野三嗣 (1980). 「楽しい体育」をめぐる問題 (3) その社会的影響もふまえて. 学校体育 (第 33 巻 9 号),

佐伯聰夫 (1980). 「楽しい体育」をめぐる問題 (2) 体育の哲学確立を一健康維持の体力づくりの立場から—. 学校体育 (第 33 巻 8 号),

佐伯聰夫 (1980). 「楽しい体育」をめぐる問題 (4) 楽しい体育への批判と偏見に答えて. 学校体育 (第 33 巻 10 号),

鈴木秀人・永島惇正 (1990). 「運動目的・内容論」における運動の手段的な価値の取り扱いに関する一考察. 東京学芸大学紀要. (第 42 集), pp. 117-123.

鈴木秀人・越川茂樹 (1994). 諸外国に見られる「スポーツ教育」をめぐる見解の検討—新たな理論モデルにおける運動の手段的な価値の捉え方に焦点を当てて—. 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, pp. 1-32.

高橋健夫 (1997). 運動の楽しさと運動技術の指導について. 体育科教育 (第 45 巻 2 号), p. 22.

高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖他 (2002). 体育科教育学入門. 東京, 大修館書店, p. 43.

多々納秀雄 (1990). 「所謂『楽しい体育』論の批判的検討」. 健康科学 (第 13 巻),

梅垣明美・友添秀則・小坂美保 (2006). 体育におけ

る人格形成プログラムの有効性に関する研究. 体育科教育学研究 (第 22 号 2 巻), pp. 11-22.